

# 〈翻刻〉奈良県立図書情報館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻七〜巻八

（人文・社会科学 日本古典文学研究室） 小助川 元太

## 【凡例】

- 一・底本は奈良県立図書情報館四一号貴重書庫88850「テイカー」により、今回は巻七と巻八を翻刻した。なお、本テキストの巻一から巻四の翻刻については、小助川「〈翻刻〉奈良県立図書情報館所蔵『帝鑑図説』（巻一〜巻四）」（『呉工業高等専門学校研究報告』七〇号、二〇〇八年八月）に、巻五と巻六の翻刻については、「〈翻刻〉奈良県立図書情報館所蔵『帝鑑図説』（巻五〜巻六）」（『愛媛大学教育学部紀要』第五九巻、二〇一二年一〇月）に掲載している。
- 二・本書には各話ごとに一丁分の挿絵があるが、誌面の都合上今回は割愛し、本文の翻刻のみとした。
- 三・本文には虫損による判読困難なところが数箇所見られるため、京都大学図書館近衛文庫蔵『帝鑑図説和訓』（二二巻、慶安三年（一六五〇）、請求番号01844「テ」貴）を参照して補った。
- 四・旧字体・異体字・俗字などではできるだけ通行の字体に改めた。  
（例）「國」↓「国」、「迨」↓「迄」、「飯」↓「帰」
- 五・底本の誤字などはこれを尊重し、とくに改めなかった。
- 六・カタカナの「ハ」・「ミ」などはひらがなに統一した。  
（例）「くはうてい」↓「くほうてい」、「よびしハ」↓「よびしは」・「したしミ」↓「したしみ」
- 七・踊り字については、ひらがなで翻刻した場合は「ハ」「ミ」、カタカナ

の場合は「ハ」「ミ」、漢字の場合は「々」に統一した。また、「〜」については、送り仮名と漢字については文字になおし、それ以外はそのままとした。

- 八・読解の便を考慮し、私に句読点等を補った。
- 九・濁点は本文のままとした。
- 十・改丁箇所については明記したが、改行についてはとくに示していない。
- 十一・丁数については、実際の丁数と柱の丁番号にズレが生じているため、実際の丁数を示している。

## 【書誌】

- 〈形態〉古活字本。  
〈巻冊〉十二冊。ただし、六冊ずつ上下二冊の合本形態。  
〈丁数〉巻一のみ序文「帝鑑図説和本序」三丁分あり。その他、各巻ごとに一丁分の目録あり。巻一（二十六）、巻二（二十三）、巻三（三十四）、巻四（三十一）、巻五（三十九）、巻六（四十六）、巻七（三十）、巻八（二十八）、巻九（三十二）、巻十（三十三）、巻十一（二十七）、巻十二（二十一）
- 〈表紙〉無地黒表紙。  
〈装幀〉袋綴。版心に柱題「帝鑑一卷（〜十二巻）」および丁数あり。  
〈寸法〉縦二十八・四糎、横二十・七糎。

〔行数〕 每半葉十一行書き。界線なし。

〔外題〕 題簽無地白。左上。「帝鑑圖說 二」「帝鑑圖說 三」ほか。(数字部分は各巻の巻数)ただし、巻一、九、十、十一は題簽なし。

〔内題〕 「帝鑑圖說巻第一」ほか。(数字部分は各巻の巻数)

〔印記〕 各巻本文第一丁表右下「奈良縣立奈良圖書館印」

〔刊記〕 巻十二本文十九丁裏六行目から九行目まで。

〔于時寛永四丁年

十一月下旬

洛陽三条寺町誓願寺前

八尾助左衛門尉開版」

〔付記〕 『帝鑑図説』の閲覧・翻刻に際しては、奈良県立図書情報館の御高配を賜った。また、書誌について高木浩明氏からご教示を賜った。記して御礼申し上げる。本稿は平成二十四年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「中世百科全書のテキストの成立基盤に関する総合的研究」課題番号 24520218)による研究成果の一部である。

【翻刻】

帝鑑図説七「(表紙)

帝鑑図説巻第七目録	
論 字 知 諫	唐の穆宗
屏 書 政 要	唐の宣宗

焚 香	唐の宣宗
敬 受	宋の太祖
解 裘	宋の太祖
碎 七	宋の太祖
受 言	宋の太祖
戒 主	宋の太祖
竟 日	宋の太祖
觀 衣	宋の太祖
容 書	宋の太祖
直 屏	宋の太祖
引 衣	宋の太祖
容 直	宋の太祖
引 衣	宋の太祖
容 直	宋の太祖

引 衣 容 直 宋の太祖」(目録裏)

帝鑑図説巻第七

論 字 知 諫

唐の穆宗皇帝とて、みかと一人おはしけり。つね／＼文字をかく事をこのませたまへり。しかるに、柳公権と申て一人のしんかあり。よく字をかく事ならびなし。ある時穆宗、柳公権がかくところの文字をゑいらんまし／＼て、則とはせたまひけるには、なんじがつねにかく文字は、いかんとしてかやうにみごとにありけるぞ。公権こたへていわく、されば文字をかく事は手のなすところといへ共、筆をもちぬる事はたゞころのうちにあり。へいぜい心たゞしうして「(一丁表) よこしまなる事あらざれば、かくところの筆法をのづからたゞし。ころよこしまなるときは、筆法をのづからあししと、かく申あげけるは、ことほりときこえけり。まことに公権は賢人なり。穆宗皇帝のひつはうをと給ふにより、人々ころのたゞしきによると申けるは、これきみの心をいさめてたゞしうせんがためとかや。よく／＼これをあんずれば、筆法にかぎ

るへからず。よろづにおゐて心たゞしきときは、そのなす所たゞしからずといふ事なし。いはんやてんかの君たる人は、ばんみんなのみなもととなり。みなもとたゞしからざる時は、国家のまつり」(一丁裏) こと、みだりにして、よろづそのりをえべからず。いまこれ公権が筆法をもつてきみの心をいさめぬれば、穆宗はやくそのりをさとりました。何共ものをの給はず。かたちをひそめ、こゝろをつゝしみ、そのりをふかくかんじ給へり。もしよく公権がことばをもちゐて心をたゞしうしたまはゞ、まことに明王たらん事申にをよばざるとかや。」(二丁表)

白紙 「(二丁裏)

挿絵 「(三丁表)

挿絵 「(三丁裏)

屏書 政要

唐の宣宗皇帝とてみかど一人ましますが、よろづ先祖のいましめにしたがひ、天下をおさめん事のみをも先祖のをしへにそむきたまはず。然るに先代の太宗皇帝のつくらせ給ひし一卷の書、金鏡録と申あり。あるとき宣宗この金鏡録の書をもつて翰林学士のくわんに令孤絢といふものに、この書をさづけましめて、よませてきこしめされけり。しかるに、この書のかんもんには、乱未嘗一不任、治未嘗一不忠賢、かくのことくのかんもんあり。そもく此もんのこゝろは、むかしがいまにいたる迄、あるひは「(四丁表) おさまり、あるひはみだるゝ事、これそのしんかのせんあくによれり。臣下のこゝろよこしまなれば、其君をながしるに、我がわたくしのみちをおこなひ、国にあくじをなし、たみのためにわざはひをなす。かやうのしんかをもちなば、てんかおほひにみだれて、太平なる事あるべからず。又、しんかの心ちうせつにして、よくそのみちをおこなひ、ふか

く君をうやまひて、国のためにさいはひをなし、たみをめぐむ事おこたらず。かやうのしんかをもちなば、天下をのづから太平なる事、なんのしさいのあるべきそや。宣宗、この書をきこしめされて、ふかくその「(四丁裏) りをかんに、よろこびましめて、しばらくよむ事とどめさせ給ひしは、ことほりとこそきこえけり。をよそ天下のきみたる人、国家を太平におさめん事をねがひたまはゞ、この書の心をもつて第一臣下を多らぶべし。もしその臣下あく人なりせば、かならずとをくしりぞけて、二度近づくべからず。又、その臣下ぜん人ならば、もつはら心にうやまひて、天下の事をまかすべし。しからはてんか太平にあらん事、申もをろかなるとかや。又、貞觀政要とて、一くわんの書あり。そもく此書と申は、先代の太宗皇帝の時、魏徴といひし忠臣とつねに天下のまつりごとを、たがひに」(五丁表) ひよろろんし給ひて、てんかをおさめ給ひし、そのしなををかきしるしたる書なればとて、すなはち屏風にかきつけ給ひつゝ、あけくれ此びやうぶにたちより、心をつゝしみ手をくみて、一々是をよみ給ひて、いま我が天下をおさめん事、いにしへ先祖のことくと、おぼしめされけるとなり。」(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)

挿絵 「(六丁裏)

焚香 疏

唐の宣宗皇帝、つねに御こゝろをはげまして、天下を太平におさめたまはん事のみをおぼしめし、しんかのいさめをき給ひて、心によるこびまませり。故にいさめの官位をおかせ給ひて、まつりごとをはからひ、きみのあしき事あれば、そのよしかくといさめけり。又、省給事中のくわんをさだめたまひて、もし君のせんじにて、よろづの事をおほせいだされ給ふとき、そのよき事をば仰せのことくはからひ、もしあしきせんじをば、きみへかくと

そうもんして、仰せのまゝにしたがはず。これと申も」(七丁表) 宣宗のよろ  
つの事をつゝしみ、しんかのいさめにしたがひ給ひて、わたくしならぬ御事な  
り。そのほか大臣たるもの、君をいさめんそのために、章疏をかいてたてま  
つれば、宣宗ぎよかんのあまりにや、香をたき、手をあらひ、こゝろをつゝ  
しみたまひて、かの章疏をよみ給へり。それ天下の君たる人、忠言耳にさか  
ひぬれば、しんかのいさめにしたがはず。しんかのいさめにしたがへば、まつ  
りごとたゞしうして、さらにみだるゝ事あらじ。されば宣宗皇帝は、いさめを  
きく事をたのしみ給ひて、よろつ臣下にしたがひ給ふ。又、大臣の章疏を見  
て、ふかくうやまひ」(七丁裏) まします事、まことにこれ大臣はそのくら  
たかうして、諸官人のたぐひにあらず。こゝをもつてつゝしみたまへり。こ  
れ又、章疏をうやまひ給ふのみならず、そのりのぜんあくをわかち、ぜんを  
ばとり、悪をばさり、まつりごとをおこなひて、天下をおさめん事のみをお  
ぼしめされけるとなり。」(八丁表)

白紙 「(八丁裏)

挿絵 「(九丁表)

挿絵 「(九丁裏)

敬 受 母 教  
宋の太祖皇帝、はじめて御くらゐにそなはり給ふ、其御はをば南那夫人  
と申けり。然るに、太祖皇帝のくらゐにそなはり給ふ事、めでたかりける次第  
とて、いづれも諸官人、みなさんだいで申つゝ、きみをいわひたてまつる。  
しかりとは申せども、母の南那はなにかおほしめされけん、うれはしきて  
いにして、御よろこびもまします。左右にはんべりける臣下たち、此よし  
を見るよりも、こはふしんなる次第とて、皆々申あげけるは、いかにきこし  
めされ候へ。我々つたへうけたまはる。それ人のおやたるものは、その」(十

丁表) 子をもつてよろこびとす。いまこれ太祖は天子たり。南那は天子の御  
はたり。かゝるめでたき御事は、いづれかこれにまさるべき。さはなくして、  
いかにぞや、御よろこびもまします事、かへすもふしんなり。南那こ  
のよしきこしめされて、則 おほせ給ひけるは、みづからこじんのいひおき  
し事をきくに、きみたる事はなりがたしといへり。それ天子たるものは、その  
身をばんみんのうへにおき、仁義のみちをおこなへば、ばんみん君をうやま  
へり。しかる時は国おさまり、天子のくらゐをうしなふべからず。もし又、天  
下をおさむるに、第一ぶたうをさきとして、」(十丁裏) あくじをつねにたく  
みなば、ばんみん君をうらみつゝ、われもとてきをせば、くゆる共多きぞ  
なし。こゝをもつてあんずるに、今、我が子は天子たりとはいへども、そのく  
らゐをたもつ事、まことに是やすからすとおもふにつけて、をのづからこゝろ  
によるこぶ事あらじと、かやうにの給ひし御事は、臣下につげ給ふのみなら  
ず、太祖をいましめ給はんとの御ことのはと見えにけり。故に、太祖も母  
の仰せをきこしめされて、ことほりなりとおほしめし、すなはちはうへをれ  
いはいして、はゝのをしへにそむかじとおほしめす事、ことほりなれ。さて、  
それよりも」(十一丁表) 太祖皇帝はあけてんかをおさめん事のみを御こ  
ゝろにはげまして、よくしんをすて、ひだうをさり、みちをおもんじ、儒者  
をたつとび、けいばつをゆるかせにし、てんかのたみをめぐみ給へり。故  
に、天下四海あんらくにして、国にらんげきなかりけり。」(十一丁裏)

挿絵 「(十二丁表)

挿絵 「(十二丁裏)

解 裘 賜 将  
宋の太祖皇帝の御時、いまだ蜀の国みやこへしたがざりせば、たいぢ  
せんとおほしめし、王全斌といふものをたいしやうとなされつゝ、しよくの

国へつかはさる。全斌、きみのおほせにまかせて、数万騎をひきぐして、しよくをさしてぞくだりける。おりふし冬の事なれば、雪霜ゆきしもことにふりつもり、寒風かんふういとほげしかりせば、みやこまでも大雪ふり、さむさはつねにかはりけり。このとき太祖皇帝は、講武殿かうふてんにみゆきなされて、床ゆかにはせんをしき、四方にきてうをはり、身には紫貂しじょうのかはごろもをき、かふべには「(十三丁表)紫貂のぼうしをちやくしてかんきをふせぎ給ひけり。しかるに、みかど、左右さゆうにはんべりけるしんかにむかつておほせけるには、われいまかやうに紫貂しじょうのかはごろもをきて、かんぶうをふせぐといへ共、てんちしきりにかんじつ、さむさいよ／＼身にとをる。こゝをもつてあんするに、しよくの国へくだりける、すまんにんのつはものども、あけくれしをいたゞき、ゆきをしのいで、かんきはげしく身にとをり、さむさはかぎりあるまじき。さあらばこれををくらんとて、御身にき給ひしかはごろも、又は紫貂のぼうしまてぬがせ給ひて、それよりも蜀しやくへ「(十三丁裏)くだし、全斌せんひんにあたへ給はんとて、馬をはやめていそかせたまへり。又、そのほかすまんぎのつはものに、せんじをくだしたまひけるは、さてもみな／＼此度たひはかんぶうに身をまかせ、寒氣かんきに心をいたはりて、さぞやかんななるらんとおもはざるにはあらねども、かはごろもにかぎりあり。すまんにんのもの共に、のこりなくかはごろもをあたへたくはおもへども、そのかずおほき事なれば、いかんとしてかかなふべし。たゞみづからがこゝろのうちをおもひやりてえさせよとの給ひしことのはは、むかしがいまにいたるまで、ためしなき次第しだいなり。全斌、君より「(十四丁表)をくらせたまふかはごろもをすなはちおがみたまつり、きみの御ごおんをかんじつ、おぼえずなんだをながしけり。そのほかすまんにんのつわものども、君のおほせをうけたまはり、かたじけなき次第しだいかな。ぜひに御おんをほうぜんとて、われも／＼といさみ、たがひにちからをあはせつゝ、こゝをせんとつゝかひぬれば、さうなくてきをほろぼし、しよくの国をたいぢして、みやこへこそはのぼりけ

り。これと申も太祖のじひのこゝろあるゆへに、すまんぎのつはものども、いづれもいのちをかへり見ず、さうなく敵てきをしたがへり。それ、てんかの君たる人、しんかの心を「(十四丁裏)かんじつゝ、つねにおんしやうをほどこしたまはゞ、しんかもこゝろをはげまし、きみをうやまひたまつりて、こくどゆたかにあらん事、申もをろかなるとかや。」(十五丁表)

白紙 「(十五丁裏)

挿絵 「(十六丁表)

挿絵 「(十六丁裏)

碎くだく七しち宝ほう器き はらのうつものを

宋の太祖皇帝、蜀の国をたいぢして、蜀の大將孟昶たいしやうまちやうをめされて、はじめてげんざんし給へり。然るに、孟昶あまりゑいぐわにおごりつゝ、金銀七宝をもつて溺器でききをつくりはなやかにこそかざりけり。太祖これを御覽じて、おほきにげきりんまし／＼て、左右さゆうにはんべるものどもに仰せつけさせ給ひつゝ、かの溺器でききをくだかせたまへり。此とき太祖仰せけるには、七宝は是たつときたからなり。しかるに、なんじ是をもつて飲器いんきをつくり、榮花えいぐわにおごるはいはれなし。なんじ、もしこれをもち、蜀の国へかへりなば、いよ／＼くわ「(十七丁表)れいをこのみつゝ、いかなる事をかなすべけん。さらにしられぬ事なれば、すなはちこれをうちくだく。それ国家こっかをおさむるもの、榮花えいぐわにおごる事あれば、国にわざはひいできつゝ、かならず国をうしなへり。それ太祖皇帝は、宋の天下はじまりて、まづ一ばんの君なれば、後々ごごまつだいにいたるまで、子孫しそんのためをおぼしめし、ゑいくわをきらはせ給ふ事、ことはりとこそきこえけり。」(十七丁裏)

挿絵 「(十八丁表)

挿絵 「(十八丁裏)



受<sup>うけて</sup>言<sup>ことば</sup>書<sup>しるす</sup>屏<sup>ひやうに</sup>

宋の太祖皇帝のとき、王昭素と申もの、かくもんひろく名をとりて、天下にならぶものはなし。太祖、かれが事をば、もとよりもしろしめされつゝ、昭素をよびいだし、国子博士のくらゐになされて、よろづの事をい給ふ。此時、昭素がよはひ七十餘さいになるとかや。あるとき太祖、昭素にちよくめいなされつゝ、易の乾の卦をよませ給へり。然るに、飛龍天にあるといふにいたりて、昭素申けるは、これ天下の君たるべきのしやうなりとて、いにしへよりの事をひいて、すなはちこれをしやうこととして、君を「(十九丁表) いさめ申さんとのころのうちの見えければ、太祖、やがてさとらせ給ひて、御よろこびまし〜て、昭素にとはせ給ひけるは、我が身をけんごにして、さて又、てんかを太平におさめんとの事のだうりをば、いかゞせんとうりしかば、昭素、こたへて申けるには、それ天下をおさむるには、たみをめぐむにしくはなし。さて又、わが身をおさむるには、よくをさるにしくはなし。それたみは、国のもとたり。もとかたきときは、国いよ〜あんらくなり。故に、国をおさむる事は、たゞ民をあいするによる。よくをなすは身のあたなきこしめして、なのめならずにおぼしめし、すなはち昭素が申あげしことのはをわすれじとの給ひて、屏風にこれをかゝせ給ひて、つね〜御覧なされけり、それにしへをつたへきくに、天下のおさまらざる事は、君のころよくふかく、ゑいぐわをこのませ給ふゆへ、ばんみんこれをまなびつゝ、われも〜とよくをなし、人のものをうばひとる。故に国みだれて、其君くらゐをうしなへり。こゝをもつてあんずるに、天下の君たるへき人は、かならずたみをめぐむべし。たみの心あんらくなれば、君もゆたかにましませり。」(二十丁表)

白紙(二十丁裏)

挿絵(二十一丁表)

挿絵(二十一丁裏)

戒<sup>いましむ</sup>主<sup>しゅの</sup>衣<sup>い</sup>翠<sup>すい</sup>

宋の太祖皇帝の御むすめに、永寧公主と申せしあり。ある時、公主、翠鳥の羽にておりたる鋪翠と申衣裳をめされて、太祖の御まへにいでさせ給へば、太祖、公主のめしたる鋪翠のいしやうのはなやかなるを御らんじて、ふかくきはせ給ひけり。故に、公主にむかつて仰せけるは、なんじがきたるいしやうをぬぎ、みづからにえさせよ。けふよりして以後、かゝる衣裳のはなやかなるをきべからずと、かたくいましめ給ひしかば、公主、きこしめされて、笑て仰せけるやうは、さればこの衣裳、さほどくわれいならざるに、なん(二十二丁表)ぞやかくの給ひけるぞ。太祖おほせけるには、なんじ一人この衣裳をきば、宮中のきさきども、をよぶもをよばざりけるも、見るをみまねにまなぶべし。さあらんときは、みやこのうち、翠鳥の羽をうり、あたひさだめてたかゝるべし。ばんみんこれを見るならば、はねをうらんがそのために、翠鳥をとらん事、われおとらじとあこがれて、数方の翠鳥をころさん事は、なんじ一人がなすとがなり。なんじ、もし長久にして、ふつきならん事をねがはゞ、かゝるあくぎやうをなすべからず。たゞ身のさいわひならん事をつね〜ころにねがふべしと、かくの給ひければ、公主、「(二十二丁裏)太祖のげきりんましますていを見て、まことにおそれ給ひつゝ、これ我がふかきあやまりとて、父の仰せにしたがひ給ふ。されば、いにしへの人のいわく、宮中にかみをたかくゆふ事をこのめは、天下これをまなびつゝ、たかき事一尺なり。又、宮中にいしやうのそでをながくすれば、てんかまなびて、一疋のきぬをもつて、すなはちこれを袖とせり。かみをまなふしもなれば、それかみたる

へき人は、よろづにつめてつゝしむへし。天下のきみ、多いくわをこのめば、ばんみんたからをつみやして、かみをまなばぬものもなし。されば、太祖皇帝の翠鳥をころす事をあはれみ」(二十三丁表) 給ふのみならず。こればんみんのためぞかし」(二十三丁裏)

挿絵 「(二十四丁表)

挿絵 「(二十四丁裏)」

竟日観書

宋の太宗皇帝とてみかど一人おはします、つねぐがくもんをこのませ給ひて、あさみのこくより、ゆふぐれ申の時までもよませ給ふ事、へんしもおこたりまします。あるときあまたの書物を多いらんましゝて、臣下の儒者に仰せつけさせたまひつゝ、いにしへよりいまにいたるまで、天下の王たる人の、よろづの事のおこなひを、ことごとくあつめ給ひて、則一つ書となし、かづを申せば、一千巻。なづけて太平御覽といへり。しかるに、太宗この書を毎日三巻巻つゝよみ給へり。こゝに宋琪と申て一人の臣下あり。」(二十五丁表) きみへそうもん申けるは、まい日かやうに書物を御らん候は、御こゝろつかれ給ふへし。しよせんたゞおりゝに御覽候へかして申せしかば、太宗仰せけるやうは、むかしがいまにいたるまで、天下の王のおこなひを、のこらず此書にしるしおく。故に、此書をひらきよむならば、人の心をあきらかにして、いよく智恵をましめべし。我此りをおもひぬれば、毎日これをよむといへども、心にふかくたのしめば、さらにつかるゝ事はなし。一年がうちにして、この太平御覽千巻の書をよみてん事をおもひぬれば、毎日三巻つゝよみし事、すこしもおこたる事」(二十五丁裏) なしと、おほせけることとはりなり。又、四書五経のうちにおめて、そのりのさとしがたきをば、呂文仲にとい給へり。又、文字のひつはうをば、王著といひし者にとい、又、

字のよみがたきところをば、葛湍にといたまへり。つらゝあんずるに、それ聖人はむまれながら耳とく目あきらかなりといへ共、つねに学問をつとめざれば、其徳さらになしがたし。むかしが今にいたるまで、天下のおさまりし事、又、みだりし事、よろづ天下のりにおめては、ひろく書物を見てまなばずんばしりがたし。がくもんつねにつとめぬれば、天地のりをこゝろにさとり、さらに」(二十六丁表) まよう事はなし。それ太宗皇帝は、あけくれがくもんおこたらす、心にはげまし給ふゆへ、天下太平におさまり、いま末代にいたるまで、がくもんさかんなる事は、又、この君よりはじまれり。」(二十六丁裏)

挿絵 「(二十七丁表)

挿絵 「(二十七丁裏)

引衣容直

宋の太宗皇帝のとき、冠準と申て一人のしんかあり。直学士のくわんなされて、つねにうやまひたまひけり。かるがゆへに、冠準もちうせつをつくして、きみをいさめたてまつる。あるとき冠準、御まへにしこうして、ふかくきみをいさめしかば、太宗なにとかおぼしめし、すでにげきりんましゝて、御座をたゝせたまひつゝ、宮中へいり給ふ。冠準此よし見るよりも、すなはち御衣のたもとをひきとゞめ、もとの御座にうつしたてまつり、かさねていさめを申せしかば、太宗せひなくこの事をつくゝ」(二十八丁表) ときこしめされてより、冠準がいさむるところ、もつともなりとおほしめし、御よろこびましゝて、すなはちおほせけるやうは、われ冠準ごときのしんかをもつ事、むかし唐の文皇の、魏徴をしんかとし給ふがごとくなりと、かくの給ひしことのは、さらにたぐひはなかりけり。それ人のしんかとして、君にちうあるともがらは、よろづの事をいさむへし。君もししんかのいさめをもちあ

ずんば、臣下も君をうやまはず。いま太宗皇帝は、寇準がいさめをき、一人  
たにいからせたまへども、つゝにはしんかにしたがつたまひて、寇準をうやま  
ひまします事、君臣の「二十八丁裏」みち、あきらかなり。かるがゆへに、臣下  
も又、よく我がこゝろをつくして、てんかのまつりごとをはからひ、きみをし  
ゆごしたてまつる事、申すもをろかなるとかや。

帝鑑図説巻第七終 「二十九丁表」

白紙 「二十九丁裏」

挿絵 「三十丁表」

挿絵 「三十丁裏」

帝鑑図説八 「表紙 外題」

帝鑑図説巻第八目録

改容	聴講	宋の仁宗
受無	逸	宋の仁宗
不喜	珠飾	宋の仁宗
納諫	遣女	宋の仁宗
天章	召見	宋の仁宗
夜止	焼羊	宋の仁宗
後苑	御麦	宋の仁宗
軫念	流民	宋の神宗
燭送	伺臣	宋の神宗

白紙 「目録裏」

帝鑑図説巻第八

改容 聴講

宋の仁宗皇帝とて、みかど一人おはしけり。しかるに、宰相王曾とて、  
一人の臣下あり。つくぐこゝろにおもひけるには、わがきみはじめて御位  
にそなはり給ふゆへ、いかなともして儒者をちかづけ、君にがくもんをす  
めて、聖人のみちをおこなひ、天下を太平におさめたまはん事のみをねがひ、  
あるとき君へ申けるは、あはれ我がきみ、宗政殿へみゆきなされて、孫奭・  
馮元此二人の儒者をめされて、論語をよませてきこしめされかすと、しきり  
にすゝめたてまつり「一丁表」しかば、仁宗げにもとおほしめし、則、彼  
二人の儒者をめされて、はじめは毎日おこたらず書物をよませてきこしめし、  
其後はおりに、たへず二人をめされて、ものをよませたまひけり。もしも  
仁宗きこしめされ給ふとき、あるひは左右を見まはし、ぎやうぎたゞしからざ  
れば、孫奭すなはちおもひけるには、君のこゝろたゞしからずして、書物に  
心いらざれば、よみてもさらに多きなして、御まへをしりぞき、かならずや  
めてよむ事なし。仁宗、孫奭がだうりをつくし、みちをたゞすを御らんじて、  
たちまち御心をひきかへ給ひて、孫奭をおそれ、ぎやうぎをよく「一丁  
裏」あらためて、ちやうもんせさせ給ひけり。されば仁宗皇帝は、をのづか  
らとくそなはり、ことに賢人の宰相あつて、がくもんをすゝめたてまつり、  
又、孫奭・馮元がともがらあつて、れいぎのみちをたゞして、つねに書物を  
よみしかば、仁宗のこゝろあきらかにして、仁義をたゞし、忠恕のみちをおこ  
なひて、末代にいたる迄、賢君といはれ給ふ事、申もをろかなるとかや。「二  
丁表」

白紙 「二丁裏」

挿絵 「三丁表」



挿絵 「(三丁裏)

受<sup>うく</sup>二 無<sup>ぶ</sup> 逸<sup>いつ</sup> 図<sup>ず</sup>一  
宋の仁宗皇帝のとき、学士の官に孫奭といふものあり。毎日講読閣にしようして、君の御まへにはんべり。いにしへの帝王のあるひは天下を太平におさめ、又は天下をみだらして、国家のほろびし事どもをくりかへし〜ねんごろによみたてまつり、又、無逸の篇と申て、一つの書物のありけるが、この書のうちには、いにしへの帝王のてんかのまつりごとをつとめ、又、ばんみんをあはれみ給ふ事共をつぶさにしるしおかれしを、孫奭、この書のうちにおゐて、ゑをかき、図をつくりて、これを無逸の図と名つけ、仁宗へ「(四丁表) すゝめたてまつる。仁宗ぎよかんまし〜て、講読閣のうちにゐて、此図をかせせ給ひつゝ、毎日御覧なされけり。其後あらたに邇英閣・延義閣とて、二つの閣をつくらせ給ひて、蔡襄と申ものにちよくめいあつて、かの無逸の篇を此二閣の屏風にかゝせたまへり。かやうになされける事は、つねにこれを御らんじて、天下をおさめまします事の、そのいましめのためとかや。そも〜この無逸の書と申は、むかし周公旦の成王をいまして、つくらせ給ふ書なるとかや。さればこの書のこゝろは、まづてんかのたみ百性、春たがやし秋おさむるのみちをしるし、」(四丁裏) 又はてんかのまつりごとの、つとめなすべき事の理を、成王にしらしめて、よろづ天下の事におゐては、つねにおそれつゝしみて、あへてゆるかせにせざるときは、をのづから、さいわひをえて、つくらゐをたまします事、まことに長久なるへきなり。おろそかにしたまはゞ、寿命をのづからみじかふして、やかて位をうしなひ給ふべし。いにしへ商の中宗皇帝・高宗皇帝祖申のごとく、又、周の大王文王のごとく、よく聖徳をおさめたまひて、まつりごとをし給ふべし。又、殷の紂王のごとく、あくじをなし、ぶたうをたくみ給ふべからずとて、ふかくいましめ給ひけり。

そのことの「(五丁表) はのあさからざる事、まことに万世にいたるまで、てんかのきみたる人はかゞみとすべき事ぞかし。故に、仁宗も孫奭がつくりし無逸の図を御覧じて、則蔡襄にちよくめいなされて、屏風にこれをかゝせ給ひて、我がいましめとし給へり。さればこの無逸の書のいましめをもつて、天下をおさめ給ひなば、などか太平ならざらん。」(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)  
挿絵 「(六丁裏)

不<sup>す</sup>レ 喜<sup>よろこび</sup> 二 珠<sup>しゆ</sup>・飾<sup>しよくを</sup>一  
宋の仁宗皇帝の時、宮中のきさきたち、玉をもつてかうべのかざりをなす事、われおとらじとなせしかば、故に、みやこのうち、玉のうりかいかうぢきなり。仁宗此よしをきこしめし、御こゝろにおぼしめされけるは、宮中のきさきども、玉をもつてかざりとする事、たちまは是をとゞめずんば、天下ばんみにいたるまで、われおとらじとまなぶへし。いかんともしてこの事をとゞむべしとおほしめし、ある時、べつでんにうつらせ給ひて、ゆふらんなされる所に、もろ〜のきさきたち、みな〜御まへにはん」(七丁表) べり給へり。第一てうあひなされる張貴妃と申御きさき、きみの御前へいでさせ給ふが、よにめづらしきたまをもつて、かうべをかざり給ひけり。みごとなるとも中々に、心ことばもおよはれず。仁宗此よし御覧じて、御衣のたもとをさしかざし、張貴妃の御方をば二目とも見たまはず。則仰せけるやうは、なんじたちがかうべのていをよくみれば、是さいわひにはあらずして、これわざはひのすがたなり。いそぎそのかざりをとりてすてよかしくありしかば、張貴妃心にはづかしくおほしめし、すなはち御まへをたちさりて、かうべのかざりをとり給ひて、べつのかざりを「(七丁裏) なされつゝ、又御まへにまいられけり。仁宗このよし御らんじて、御よろこびまします。これよりして、宮中の

きさきたち、仁宗のきはせ給ふを見るよりも、二たびかざるものはなし。故（かろかゆへ）に、みやこのうち、玉たまのあたひやすかりき。つら／＼おもんみれば、たまはたからのものなれども、うへたる者もののじきにならず、こどへたるものゝころもにならず。しかる時はいたづらにたみの五穀こくをつみやして、あまたの玉たまをかいあつめ、時のしやうくわんとなす事は、きはめてなんの多きぞなし。故（かろかゆへ）に、明君めいくんは五穀こくをふかくたつとんで、玉たまをいやしみ給ふ事、ことはりとこそ、きこえけり。」（八丁表）

白紙 「（八丁裏）

挿絵 「（九丁表）

挿絵 「（九丁裏）

納諫（いれて、いさめを） 遣女（やる、ちよを）

宋の仁宗皇帝（じんそう）のとき、一人のしんかに王徳用（わうとくよう）といふものあり。きみのおほせによりて、定州（ていしゅう）の守護（しゆご）となる。しかるに、徳用（とくよう）、あるときみめよき女房（にようぼう）を二人もとめて仁宗（じんそう）へこれをたてまつる。仁宗（じんそう）、この二人の女房（にようぼう）を御（ご）らんにて、御よろこびはかぎりもなし。しかりとはいへども、すなはち宮中（きうちゆう）にとゞめ給ふ事も、きみへそもん申けるは、此二人の女房（にようぼう）を宮中（きうちゆう）にとゞめ給ふべからず。たゞねがわくは、二人のものを、いづくへなり」（十丁表）ともをくらせたまへかして、しきりにすゝめたてまつるに、仁宗（じんそう）わらつて仰せけるには、われはこれ真宗皇帝（しんそう）の子なり。なんじはこれ宰相（さいしやう）王旦（わうたん）が子なり。しかるに、なんじが父王且（ちよ）は、つねにわがちゝ真宗（しんそう）をいさめて、たがひにくんしんのみちあきらかなり。しかるときは、われとなんじは代々（たいたい）のたのしみあり。これよのつねの臣下（しんか）とおなじからず。しからば、われ、なんじにしさいをかたるべし。この二人の女房（にようぼう）は、王徳用（わうとくよう）がわれにすゝむるところなり。しかるを、みづからあやま

りて、宮中（きうちゆう）にとゞめおき、つねに左右（さうゆう）にはんへりしを、今又（いままた）、此二人のものをいかんとしてか、」（十丁裏）宮中（きうちゆう）をいだしへきぞと仰せける。王素（わうそ）、このよきくよりも、かさねて申あげけるは、きみもし此二人のものをつねに左右（さうゆう）におかして、宮中（きうちゆう）をいだし給はずんば、これ我がふかきうれいなり。そのゆへいかんと申に、この二人の女房（にようぼう）、つねに君の御そばにあらましかば、かならず君のこゝろをまよはし、せいとくをくらますべし。われこのゆへをそんじて、しきりにかくぞ申けり。仁宗（じんそう）、此事（このこと）をげにもなりとおぼしめし、我があやまりをさとり給ひて、すなはち官人（くわんにん）共（ども）にちよくめいあつて、かの二人のものどもを、宮中（きうちゆう）をいだしせ給ふ。王素（わうそ）、此よしを見るよりも、又（いままた）、仁宗（じんそう）に「（十一丁表）申けるには、きみ、すでに臣（しん）がいさめをきこしめし、いさめにしたがひまします事、まことにこれあさからず。しからば、君、まづ宮中（きうちゆう）へいらせたまひて、御心（ごしん）しづかに此二人の者（もの）をいだしせたまへかし。なんぞにはかにあはたしくいだしせ給ふと申せしかば、仁宗（じんそう）仰せけるには、われ、宮中（きうちゆう）にいりなば、万（ばん）に一つも此ものどもになごりをおしみ、我がこゝろをひかさされて、かれを出しがたかるべし。たゞすみやかにいだしせよとおほせけるこそことはりなり。いまだ時もうつさぬまに、官人（くわんにん）きたつてそもんす。もはや二人のものども、宮中（きうちゆう）をたちいで、東門（とうもん）に」（十一丁裏）さりぬと申せしかば、ここにおめて仁宗（じんそう）は、朝会（ちやうかい）をしりぞけて、宮中（きうちゆう）にいり給ふ。それ人の君として、しんかはいさめをきはせ給ふ事は、女色（にようしよく）てうあひの事のみなり。然るに、仁宗皇帝（じんそう）は、二人の女房（にようぼう）を宮中（きうちゆう）にとめ給ひて、つねに御まへにはんへりしか共（ども）、王素（わうそ）がいさめにしたがひて、二たびかれをかへりみたまはず、宮中（きうちゆう）をいだしせ給ふ事、これせいとくおしるべなり。」（十二丁表）

白紙 「（十二丁裏）

挿絵 「（十三丁表）

挿絵 「（十三丁裏）

天・章 召・見

宋の仁宗皇帝、あるとき天章閣へみゆきなされて、もろくの臣下、御史中丞以上をめされ、御手づからみことのりをあそばし給ひて、しんかたちにはせ給ふは、それ天下のまつりごとにおみては、すこしもたがふ事あらば、すみやかにかきしるし、上へそうもん申せとて、かみと筆とをあたへたまへり。この時、翰林学士張方平と申者、四つのいさめをかきたて、きみへそうもん申けり。君、このよしを御らんじて、もつともなりとおほしめし、ふかくおどろきたまひけり。又、明日さうてうに、手づからみことのりをあそ(十四丁表) ばし給ひて、きのふの仰せをうけたまはらざるものあらば、けふのおほせをうけたまはり、すみやかにきたりていさめをなせと仰せけり。このとき、侍御史河郷といふものあり。すなはちそうもん申けるは、翰林管内外制文の諸臣下ども、いまより以後、君の御身にあまりあらば、見るにつけ、きくにつけ、ふかくいさめをなさんとき、御ゆるしましませば、我もくと忠言をつくして、かならず君をいさむべし。仁宗、此よしきこしめし、ことはりなりとおほしめし、御よろこびはかぎりもなし。それ仁宗皇帝は、天下をおさめん事のみに心をつくし給ふゆへ、諸臣下どもを(十四丁裏) めしいだし、いさめをなせと仰せけり。故に、張方平、君の仰せにまかせつゝ、いさめをなしたてまつる。仁宗、よくいさめにしたがひますゆへ、天下太平におさまる事、申すもろかなりとかや。(十五丁表)

空白 (十五丁裏)

挿絵 (十六丁表)

挿絵 (十六丁裏)

夜止 焼・羊

宋の仁宗皇帝、ある日の事なるに、臣下にむかつて仰せけるには、われ、すぎにし夜すがらの事なるに、いねんとするに、いねられず。故に、腹中すでにうへのぞみて、羊の肉のやきたるをしようせん事をおもひつるとの給ひしかば、しんかどもはうけたまはり、すなはち申けるには、などさやうにおほしめさば、人をおこせましとて、取よせずめ給はずや。仁宗、おほせけるには、申はさる事なれ共、みづからころにおもひけるは、われ、いま一たびさやうにせしかば、膳方のものどもが、つねのかれいとなして、(十七丁表) よなくひつじをやいて、かならずわれにすむべし。もしさあるものならば、そこばくの羊のいのちをがいせん事、まことにこれおほかるべし。

なんぞ口腹のぞみをほしひまゝにして、あまたの羊をころさん事、おもへばこれ我がとがなり。これによつて、のぞみややむと仰せけるこそ、ことはりなれ。又、ある日の事なるに、ある人、はまぐりを二十枚、仁宗へすゝめたてまつる。しかるに、はまぐり一枚の其あたひ、銭千文ときこしめし、仁宗の給ひけるには、我一度膳をすむるに、銭二万八千文をつゐやせり。もしたびかさなるものならば、あまたの銭をつゐや(十七丁裏) さん事、これもつてはかりがたし。しよせんたどはまぐりをしよくすまじきと思召、かのたてまつりしはまぐりを、則かへし給ひけり。それ仁宗皇帝は、宋朝第一の仁君にてましますゆへ、ものゝがいをなす事を、常におそれ給ひけり。いはんやたみをあはれみ給ふ事、申もをろかなるとかや。故に天下太平におさまりて、国土をのづから長久なり。(十八丁表)

白紙 (十八丁裏)

挿絵 (十九丁表)

挿絵 (十九丁裏)

後苑 観 麦

宋の仁宗皇帝、つねに農人のことわざを御いたはりまし／＼て、たみのくらふをなす事は、いかならんとおぼしめし、すなはち宮中後苑のうちに、一つのあき地のありけるに、麦をうへさせ給ひて、又、そのところに、一つの小殿をたて、なづけて宝岐殿といへり。さて、宝岐殿といへる事は、むぎ一くさに、ほ二ついできたるを、これを岐といふ。これ豊年のさいわひなり、もつとも宝とすべきものなりとて、宝・岐の二字をとつて御殿の名とし給へり。まいねんむぎのさいちうには、仁宗、後苑にみゆきなされ、宝岐殿にまし」(二十丁表) まして、むぎはたけをけづらせて御覧なされて、それよりも、御どものしんかむかして仰せけるは、われ、宮殿のまへに草木のはなをばうへもせで、毎年むぎをうゆる事、こゝに一つのしさいあり。われ、つねに宮中にて、天下のたみ百性、かうさくのために力をつくし、あけくれかかんなんをずるをしらず。故に、宮中のまへにむぎをうへて、民のかんなんをこゝろむと、仰せけるこそことはりなり。それ仁宗皇帝は、たつとき天子の位たりといへ共、いやしきたみの事迄も御心にかけてさせ給ひて、むぎをうへさせ給ふ事、民百性のくるしみをしろしめさんがためとかや」(二十丁裏)

挿絵 「(二十一丁表)

挿絵 「(二十一丁裏)

宋の神宗皇帝とて、みかど一人ましませり。この時、王安石とて、一人の臣下あり。あらたにはつとをおこなひ、たみ百性をなやまして、へんしもゆるやかなる事なし。あまつさへ、熙寧七年のとし、天下おほひにひでりして、ばんみんうへにのぞみけり。そのなかにも、東方・北方のたみ百性、みな／＼うへにのぞみつゝ、おやは子をはこくまず、子はおやをたのしまず、みなちり／＼になりはてゝ、こゝかしこへと、るらうして、ゆきたをれてぞ、し／＼にけり。

あはれなりけるありさまとも、申はをろかなりとかや。こゝに光州の」(二十二丁表) 守護鄭侠と申もの、光州をたちいでゝ、みやこへのぼるみちすがら、このよしを見るよりも、ふかく心にあはれみて、みかどへ此よしそうもんし、たみのうれいをすくはんとて、かのたみのありさまを、くはしくゑづにうつしけり。そのゑのなかには、木の葉をとり、くさのねをほりて、うへをしのぐところもあり。きたるいしやうをやぶりつゝ、これをくらふ人もあり。あるひはたちまちうへし／＼て、みちにふし、みぞへたをるゝものもあり。老人は杖をつき、いとけなき者をば手をひきて、こゝかしこへとまよひける。かゝるふびんのありさまども、のこらずゑづにかき」(二十二丁裏) するし、いそぎみやこへのぼりつゝ、かのゑづをもつて、きみへすゝめたてまつり、又、そうもんして申けるには、きみ、いまだんかのはつとをきびしうしたまひて、ばんみんゆるやかなる事なし。かるがゆへに、てんちの気も、きみのごとくにさからひて、雨ふらざる事ひさし。君、もしあめをねがひたまはゞ、まづはつとをゆるかせにして、ばんみんをめぐみたまふべしとて、ふかくいさめたてまつる。神宗、このゑづを御らんにて、あはれみのこゝろきざし、宮中にいらせたまひて、そのよもすがら、まどろみたまはず、とやせん、かくやあらましとて、たみの事をあんじ」(二十三丁表) たまへり。夜もすであけぬれば、君よりのせんじには、十八條のはつとをば、けふよりしてゆるすへし。このよしかくと国々へふれをなせとおほせければ、ばんみん、このよしうけたまはり、よろこぶ事はかぎりなし。てんもかんじまし／＼て、おほきに雨ふり、草木雨露のめぐみをえて、五穀にみのりぢくすとかや。されば、天下の君たる人、まつりごとをたゞしうして、民をあはれみましますせば、天地をのづからかんだうして、国にわざはひなかりけり。」(二十三丁裏)

挿絵 「(二十四丁表)

挿絵 「(二十四丁裏)

燭ともしひ 送おく 伺し 臣しんを

宋の神宗皇帝しんそうこうていのとき、蘇軾そしやくといひししんかあり。しかるに、蘇軾、小人のざんげんにあふて、たちまちくわんをしりぞけて、おんごくへながされけり。そのうち神宗、はうぎよしたまひてより、その御子、哲宗てつそうくらゐにそなはり給ふ。このとき蘇軾をめしかへされて、翰林学士かんりんかくしのくわんとなる。しかるに、哲宗の御はうへ、太皇太后たいわうたうたうと申あり。哲宗、おなじく御はうへと便殿べんてんにましませる。哲宗、すなはち蘇軾にせんじくだされて、御はうへにげんざん申せとおほせけり。蘇軾、仰せをうけたまはり、すなはちいでゝ太皇太后にげん(二十五丁表) ざんす。太后、とはせたまひけるには、なんじ、いまなんの官にかなりけるぞ。蘇軾、こたへて申ける、われ、いまみかどのおほせにまかせ、翰林学士のくわんとまかりなりては候へども、われ、このくわんになるべき者にて候はず。きみの仰せといひながら、この官になる事は、これ我がふかきあやまりなり。御めんあれとぞ申ける。太后、かさねてとい給ふは、翰林学士はよきくわんなり。しかるに、なんじ、一たびみやこをながされてありしかども、いま、又みやこへかへり、このくわんになる事は、いかなるゆへぞと仰せける。蘇軾申けるは、これ、君の御おんなり。それがし、さいわひに(二十五丁裏) 太后の御ぞんじにより、又はみかどの御あはれみにより、二たびみやこへめしかへされ、そのうへ官にあがる事、かへすも御おんのほど、かたじけなしとぞ申ける。太后、の給ひけるは、われ、なんじをもちゐるにあらず。しゝてまします神宗のもちゐ給ふとおもふべし。そのゆへをたづぬるに、神宗、くらゐにましますとき、なんじがつくりし文章をよみ給ひては、ふかくかんじましゝて、よろこび給ふはかぎりなし。しかりといへども、ぞんめいふでうにして、つゐに世をさり給ふゆへ、なんじをもちゐ給ふ事ひさしからず。今、われ、なんじをもち(二十六丁表) めて学士のくわんになす事は、神宗

のころのほどをかんずるゆへぞとおほせけり。蘇軾、このよしうけたまはり、神宗の御事をおもひいだして、おぼえずなんだをながし、こゑをあけてぞなきにけり。太后も哲宗も、一度にわつとなげかせたまへば、左右にはんべるもの共も、みなかんるいをながしけり。又、太后、かたじけなくも御座ま近く蘇軾をめされて、御ちやをくだされ給ひけり。かくてやうやく夜もふけぬれば、蘇軾は我が屋にかへりけり。このとき、太后仰せけるには、さだめてみちのくらかりなん。火をともして、蘇軾ををくれとのたまひて、すなはち御まへなる(二十六丁裏) こかねのしよくだいをもつて、かれがしゆくしよへをくらせらる、太后の御おんのほど、かたじけなきともなかゝに、申はかりはなかりけり。

帝鑑図説卷第八終 「(二十七丁表)

白紙 「(二十七丁裏)

挿絵 「(二十八丁表)

挿絵 「(二十八丁裏)



